

阿部洋三氏

「今治タオル技能士会」理事、

初代タオルマイスター



阿部洋三氏



今治のタオルづくり名人のひとりで、2008年に初代タオルマイスターに任命された阿部洋三氏が今回の「タオルびと」である。宮崎タオル（株）からキャリアをスタートさせ、確かな腕を買われて山田正布（株）、濱屋タオル（有）、（株）橘屋、海野尾タオル（株）で製織技術者として活躍した。現役時代には、いち早く時代のニーズに合ったタオルを精力的に開発し、一企業の成長のみならず今治タオル工業全体の発展にも寄与してきた。現在は今治タオル工業組合の「人材育成事業」において、後世のために技術継承に力を注いでいる。

あべ・ようそう ☆ 1947年7月、愛媛県越智郡大西町（現・今治市大西町）生まれ。大西町立小学校、大西町立中学校を卒業後、1963年4月愛媛県今治職業訓練所（現・愛媛県立愛媛中央産業技術専門校）織機調整科に入所。タオルづくりの基礎を修得したのち、1964年3月に宮崎タオル（株）入社。1965年4月愛媛県立今治西高等学校定時制に入学し、働きながら学業にも取り組む。1969年10月宮崎タオル（株）退社後、山田正布（株）、濱屋タオル（有）、（株）橘屋、海野尾タオル（株）でタオルづくりに専念。1988年一級技能検定合格、2008年初代タオルマイスター認定などタオル製織者としてのキャリアを積み、産地の発展に寄与。現在は「今治タオル技能士会」理事として後進技能者の育成に携わっている。

1. 幼少年時代

海と川と山で、大いに遊んだ少年時代

阿部洋三氏は、1947年7月21日、越智郡大西町（現・今治市大西町）で農業を営む父・竹一氏と母・マサ子氏の間に姉5人、兄2人、弟1人の9人兄弟の8番目に生まれた。

1954年4月、阿部氏は大西町立小学校に入学し、勉強はそっこのけで同学年の友だちと一緒に海や川、山に行って、自然のなかでよく遊んだ。川では魚やエビを獲ったり、山では山菜を採ったり、幼少時代の楽しい思い出である。

小学校を卒業後、1960年4月に大西町立中学校に入学した阿部氏は、サッカー部に所属した。今でこそサッカーは人気スポーツであるが、当時はまだ日本人にとって馴染みの薄い球技であった。阿部氏が中学校に入学する少し前の1958年に『学習指導要領』が改訂され、サッカーを含む球技種目が多く例示され、これ以降学校教育におけるサッカー指導が徐々に進められていった（佐藤亮平他「サッカーにおける技術・戦術的特質に関する研究」54頁）。こうした背景もあり、阿部氏は、当時人気の野球ではなくサッカーを選択し、毎日部活に熱中したが、その甲斐あって県大会出場を決めた。しかし、県大会での勝利の壁は厚く、事前合宿にも参加したが、一勝することは叶わなかった。

サッカー以外は家業の農業をよく手伝った。中学時代は友だちと遊びに行く暇もなく、農作業の手伝いをどっぷりしていたため、農業が嫌になった。そのため、中学を卒業したら農業とは違う道に進みたいという気持ちが強かった。すぐ上の兄が愛媛県今治職業訓練所（現・愛媛県立愛媛中央産業技術専門校）に通っていたことが刺激となって、自分も何か手に職をつけようと考えた。このときは別段、タオルに興味を持っていたわけではなく、また幼い頃から手先が器用だったわけではない。兄弟が多かったこともあり、高校には

進学せず、家族のために働こうと漠然とおもっていた。

タオルとの出会い

1963年4月、阿部氏は愛媛県今治職業訓練所の織機調整科に入所した。座学と実技をとおして1年間、みっちりタオルのいろはを学んだ。織機調整科で学び得た知識と経験はすべてが新鮮であり、かつ難しいところもあったが、とにかく真面目に取り組んだ。織機調整科といっても織機のみならずタオル製造の一連の工程を頭に入れる必要があり、準備工程の染晒加工から製織に至るまでの基礎的なノウハウを修得した。1年間の学びで印象に残っているのは、初めて自らがデザインしたタオルをドビー織機で仕上げたときの感動である。短い限られた時間であったが、真面目にとり組んだ甲斐あって首席で卒業した。それでも、阿部氏がタオルづくりに対して真の楽しさを抱くのはまだ先のことである。

2. タオルメーカーへの就職

1年間のタオル製造のスキルを身につけて、阿部氏は1964年3月に宮崎タオル（株）に入社し、最初のキャリアを積んだ（宮崎タオルについては「タオルびと」2014年12月号～2015年3月号を参照）。宮崎タオルといえば、今治タオル工業では老舗に入るタオルメーカーである。同社入社の際には、叔父が宮崎タオルの工場長をしていたこと、そして職業訓練所の推薦があったことである。阿部氏のおもな仕事は、シャトル織機の保全・調整であり、製織技術者として初歩的な仕事に従事し、宮崎タオル在籍中は下積み時代にあたる。


毎日タオル織機の調整に明け暮れつつも、阿部氏はさらなる高みを目指して翌年の1965年4月に愛媛県立今治西高等学校定時制

課程に入学した。こうして、昼間働いて夜間勉強する日々がスタートし、けっして楽なものではなかったが、どちらも手を抜くことなかった。


定時制ではクラス委員長を毎年務め、4年次には自ら生徒会長に立候補し、生徒会長に選出された。日々の行事や修学旅行など学校行事のリーダーを担い、定時制の教員からも厚い信頼を得た。そして、1969年3月の卒業時に在学時の成績が讃えられて、校長から表彰状を授与された。表彰状には「あなたはすぐれた品性と不断の勉学によって優秀な成績をおさめましたので高等学校生徒の模範としてこれを賞します」と書かれてあった。



山田正布時代（10代後半）の阿部氏

阿部氏は、タオルづくりのファースト・キャリアを積んだ宮崎タオルを1966年10月に退社し、給料の面でより待遇の良かった山田正布（株）に1967年1月に移籍した。同社では、3年間タオルづくりに打ち込んだ。同社でもシャトル織機の保全・調整がおもな仕事であり、日勤として働いた。

山田正布時代に阿部氏は人生における一つの転機を迎えた。1969年10月、阿部氏が22歳のときに新居浜市出身で2つ年下の鈴子氏と結婚し所帯を持ったのである。鈴子氏とは定時制に通っていたときに知り合った。結婚当初は借家に住んでおり、厳しい結婚生活を強いられた。そのため阿部氏は、「なんとかもう少し楽な暮らしができるように給料を上げることはできないか」とおもい、転職を考えるようになる。

そのタイミングで、人を介して濱屋タオル（有）を紹介してもらい、1970年4月に濱屋タオルに移り、同社を退社する1973

年3月まで毎日朝6時から夜10時まで必死に働いた。同社では当時、

織機6台（半自動/今治織機85^{インチ}2台〔ジャカード織機900□1台、ドビー織機16枚1台〕と半自動/村秀式織機85吋4台〔ジャ



阿部氏（左）、鈴子氏（右）

カード織機900□3台、ドビー織機16枚1台〕を設置していた。ここではタオル織機の保全・調整はもちろんのこと、タオルの運搬などタオル生産に直接関わりのない作業もやった。濱屋タオル時代は、なんととっても稼ぎを第一に置いていたため、時間を惜しむかのように働いた。このおかげで、借家の貧しい状況から脱して、阿部氏が24歳のときに一戸建ての住宅を購入するまでになった。そして、3人の子供（長女・恭子氏、長男・^{まきし}昌司氏、次男・^{はやと}勇人氏）にも恵まれた。しかし一方で、阿部氏は、過剰労働による体力的

・精神的な限界を感じるようになり、労働環境の改善を求めて濱屋タオルでのキャリアに区切りをつけ、新天地への移籍を決意する。

3. 橋屋時代

「天職だ」とおもえた橋屋時代

1973年4月、労働環境の改善を求めて（株）橋屋に移籍することになった阿部氏であるが、同社ではおよそ38年間にわたってタ

オルづくりに関わり、今までのキャリアをベースにさまざまな経験を重ねていった。実は、「タオル作りが天職だ」とおもえたのは橋屋に入社してからである。その理由は、初めてタオルづくりの企画・開発から製造まで携わることができ、自分のおもうようにタオルづくりに打ち込めたからである。

橋屋は、1965年5月に阿部修氏によって婦人用パンツの製造・販売を生業とする個人事業として創業され、1967年1月に株式会社に改組された。1974年に徳重工場を新設してタオル製造に本格的に参入したが、すでにタオル製造は始めており、このタイミングで阿部氏が即戦力として入社を果たす。さらに、同社は1983年に海運業に進出して船舶部を設置し、1989年10月には「ホテル橋」を開業してホテル業（2010年3月閉館）にも事業を拡大し、大規模な多角的経営をおこなった。阿部氏が入社した当時は、徳重工場の他に2つの工場を運営していた。

入社して1年ほど経過した頃、阿部氏は徳重工場の工場長に就任した。それまで工場長をしていた技術者が退社したことが直接の原因であるが、26歳の阿部氏が工場長に抜擢されたのはそれまでの仕事ぶりが買われてのことである。

徳重工場には12台の豊田織機GLT5と22台のGLT8のシャトル織機が設置してあり、入社して間もなく（株）豊田織機本社の刈谷工場でおこなわれた研修に織機別に2週間、合計4週間にわたって参加した。この研修でもっとも勉強になったのは、豊田織機で徹底して実施されていた「カイゼン」であった。「カイゼン」はトヨタ自動車のモノづくりの代名詞となっているが、トヨタ自動車の生みの親である豊田織機のモノづくりの本質でもある。また、山田ベルドールジャカードの研修にも3日間参加し、エンドレスペーパー全盛期の時代に合わせて新たな知識の修得に余念がなかった。

徳重工場では、シャトル織機34台に対して従業員は13名ほどいた。従業員の男女構成は、織機保全・調整をおこなう男性従業員が2割、製織に関わる女性従業員が8割だった。これらの従業員の

ほとんどは、今治市周辺地域から通いで工場に来ていた。

工場長を務めて3年後、阿部氏は本社勤務となった。本社では製造部長に就任し、橘屋が製造するタオルのすべてにおいて責任者として携わった。橘屋はタオル製織に着手しはじめた当初から100%自社ブランドにこだわってきた。そのため、製造部長に就任した阿部氏は、数多くのタオルの企画・開発にも関わった。数え切れないほどのタオルを「一点一点企画と話し合っ」、毎シーズン生み出してきた。そのうちのひとつが「今治職人洋三」として現在でもインターネットで販売されているタオルマフラーである。このタオルマフラーは、通常よりもロングサイズ（33cm×200cm）のもので、太番手の糸を使用し組織を粗くすることで通気性を高めている。優れた肌触りを実現しているのは変化組織を用いているからである。橘屋が2011年に人材不足の問題でタオル製造から手を引いてからは、岡本産業(株)に依頼して製造を続けている。



「今治職人 洋三」として
現在も販売されている

シーズンごとに新しいタオルを企画して試作品をつくり、カタログを作成する作業は並大抵の仕事量ではなかった。しかし、阿部氏は自分のつくりたいタオルをつくれたことで毎日が楽しかった。新しい製品の着想は、おもにお客さんからの要望を細かく吸い上げたり、仲間と日々アイデアを練ったりするなかで生まれた。

（次号につづく）

